

## 第四章 叙實法

13. “Present Tense” 及び “Present Perfect”. 此叙法の職能が或事柄を事實として述べるにあることは前述の通りであるが、尙、仔細に此叙法に屬する諸語形をその各箇に就いて吟味すると、そこに又種々の異つた意義内容が含まれて居て、嚴密に言ふと必しも斯の如く簡単に説明し去るこのの困難なるものゝ存するこゝが分る。それは今日の英語が、他の多くの國語と共に、昔叙想法を用ひた場合に叙實法を用ふる様になつたこゝにも多少は關係するが、然し、此叙法の内容を複雑にする主要なるものはそれではなく、實に此叙法の本質の内に存するこゝのものである。私は昨年の小著に於いて Tense の序論を試み、それが本質的には客觀的な「時」の區別を表はすものでなく、實は、言者が或事柄に就いて陳述をなす時に於いて、其陳述事項の内容に對して懷いて居る考、即ちその思想様式の區別を示すものであつて、それが極めて不完全ながら「時」の區別を表はすこゝ見らるゝのは、其本質より第二次的に産れ出づる效果に過ぎないと言つた。さうして、後代に至つて主として

一種の「時」の觀念に基づいて發達したと思はれる“Past Perfect”及び“Future Perfect”<sup>(1)</sup>を除いては

“Present Tense” = 「直感直叙」の語形

“Present Perfect” = 「確認確述」の語形

“Past Tense” = 「回想叙述」の語形

“Future Tense” = 「想像(推測)叙述」の語形

さいふ斷案(名は暫定的のものではあるが)を下した。<sup>(2)</sup>これに依つてこれを觀れば、“Present Tense”と“Present Perfect”とは正真正銘『叙實法』である。勿論、それは或事柄を事實と思惟して述べるさいふ意味に於いてのことで、Jespersen が Sonnenschein を攻撃する爲に提出した“Twice four is seven”の如き反理的な滑稽な文(§10 參照)に於いてすら、此文の使用者がこれを事實と考へて居る限り、或は戯れにでもこれを事實と見立て、居る限り、此叙法は正當なる用法に立つ。又、Jespersen が同じ議論の續きに於いて最大の難問であるかの如くに提示した“If he is ill”の如きものでも、私の考(主として §52 參照)によれば毫も困難は無いので(尤も子供や無教育者等のする誤用の場合は此限りでない)、これ亦此叙法の正しき使ひ方である。又、

(1) これ等二つの Tenses の場合に於いてすら、從來の機械的な説明では實際の英語を合理的に解釋することの出来ないことが多い。例へば Before he *had returned* from Marygreen to Malchester there *arrived* a letter from Arabella. — Hardy, *Jude the Obscure*, III. ix.

(2) 拙著『動詞時制の研究』pp. 42, 71, 121, 148 等參照。

He has come here already の如きでも、その言者が此事柄を眞に然りと思ひ込んで居る限り、又は何等かの理由でさう見せかけて居るのであるならば、實際は he なる人が來て居らずとも、此文の動詞は叙實法の正しき用法に立つて居るのである。即ち此二箇の Tenses は言者が事實を認むるところを簡明率直に述べるのであるから、その間に直感直叙と確認確述との差異はありとも、正に 'Indicating' Mood と稱すべく、Indicative の名はこれ等の場合に最も相應しく、『直說法』といふ我が國に於ける古い譯名もこゝには當筈めて差支への無い様に思はれる。

14. "Past Tense." 然しながら、轉じて "Past Tense" を觀るに問題はしかく單純ではない。何故なれば

*I lived in London ten years ago. My brother was also with me then.*

の如きもの、即ち私が『經驗回想』又は『目路回想』と名附くる<sup>(1)</sup>ものに於いては、動詞は何れも徹頭徹尾 Fact Mood であるけれども、

*Shylock the Jew lived at Venice.—Lamb.*

の如き『非經驗回想』の場合、即ち私が又『傳承回想』と稱する<sup>(2)</sup>部類に入るものは、言者がその述べる事

(1)(2) 拙著『動詞時制の研究』pp. 122, 126 等参照。

柄を事實として信用するか、若しくは事實を見做して述べる限りに於いては Fact Mood であることは勿論であるが、然も、それが言者の親しく経験したところではないといふ點に於いて、前者と全然同一であるとは言ひ難い本質を有する。今、試みに

- (1) I saw a smith stand with his hammer, thus,  
 The whilst his iron *did* on the anvil *cool*,  
 With open mouth swallowing a tailor's news;  
 Who, with his shears and measure in his hand,  
 Standing on slippers, which his nimble haste  
 Had falsely *thrust*<sup>(1)</sup> upon contrary feet,  
 Told of a many thousand warlike French  
 That were embattailed and rank'd in Kent.  
 —Shakespeare, *King John*, IV. ii. 193-200.

(私は一人の鍛冶屋が、かんじんの鐵が鐵砧の上で冷めるのも忘れて、かう鐵槌をにぎつたまゝ突立つて、仕立屋が知らせに來た事を鵜呑みにでもしようといふ鹽梅式に口を開いて聞きとれて居るのを見ました。そして其仕立屋はといへば、手には鋏と物差とを持つたまゝで、あはてゝ飛出したので足にはスリッパを穿いて居るだけだが、それが右左あべこべといふ體たらくで、幾萬といふ佛蘭西の荒武者共がケントに陣取つてどうのかうのつて話して居たのです)

- (2) The moon shines bright: in such a night as this,

---

(1) Had thrust は勿論 “Past Perfect” であるが、序に注意を喚起して置く。これ確認の目睹回想に外ならない。

When, the sweet wind *did* gently *kiss* the trees  
 And they *did make* no noise, in such a night  
 Troilus methinks *mounted* the Trojan walls  
 And *sigh'd* his soul toward the Grecian tents,  
 Where Cressid *lay* that night.

—Shakespeare, *The Merchant of Venice*, V. i. 1-6.

(あゝ好い月だなあ。丁度こんな晩、心地の良い  
 そよ風が静かに樹々をなでゝ音も立てないといふ  
 こんな晩に、あのトロイラスがトロイの城壁に登  
 つて、クレシダが其晩寝てる希臘の陣に向つて胸  
 一杯の溜息を洩らしたのであらう)

の如きを比較して見たならば、此間の消息が明瞭に  
 分るであらう。私は去年の小著に於いて、土耳其語  
 が斯の如き場合に経験と非経験とに別々の語形を用  
 ひ、例へば、英語では等しく“he lived”と言ふ様な場  
 合でも、それが『経験回想』(目睹回想)である場合には、  
 所謂“Maziyi Shouhouidi”(=Eye-Witness Past)を用ひて

o yashadi

と言ひ、若しそれが言者の直接経験するところでは  
 なくて、傳承するところに過ぎない場合には、私の  
 所謂『傳承回想』、即ち土耳其文法の所謂“Maziyi Naqli”  
 (=Reporting Past)を使つて

o yashamish

と言ふ事實を指摘し、<sup>(1)</sup> 我が國語に於いても、古く

(1) 拙著『動詞時制の研究』pp. 125-6 参照。

は「き」を「けり」が此兩者の區別を明示したもので、例へば、『昔男ありけり』は元來『昔一人の男があつたけな』を『昔一人の男があつたさ』等と譯すべきものであつたことを説明した。<sup>(1)</sup> Teuton 語に於いては、斯の如き區別が、獨立文の場合に於いて用語の形態の上に存在した形跡は認め難いが、獨逸語では今日でも所謂 Indirect Narration の形式に於いて或事柄を傳承事項として傳達する時、例へば

Er sagte mir, dass seine Mutter krank *wäre* (or *sei*).  
(=He told me that his mother *were* [or *be*] ill)

の如く、從屬文句に叙想法を用ひ、又、古代英語に於いても同様の場合に、

Oft us men secgaþ þæt hi unsynnige *bēon*.

—Ælfric's *Homilies*, II. 330.

(=Often men tell us that they *be* sinless)

Hēsæde þeah þæt þæt land *sie* swiþe lang norþ þonan.

—King Alfred's *Orosius*.

(=He said, however, that that land *be* very far thence to the north)

Ēac swelce þæt is gesegen þæt hē *wære* gewis his seolfes forðfore of þæm þe wē nū secgan hȳrdon.

—Bede's *Ecclesiastical History*, IV. xxiv.

(=Also it is a tradition that he *were* aware of his own death, from what we now heard said)

(1) 拙著『動詞時制の研究』pp. 127-30 参照。

Cwædon pæt hē *wære* wyruldcyninga,  
manna mildust.—*Beowulf*, 3180-1.

(=They said that he *were*, among world kings,  
The mildest of men)

の如く叙想法の用ひらるゝところが極めて普通である。これは此傳承事項が、只の傳承に過ぎず、従つて其事項の眞偽に關しては傳達者に於いて保證の責に任ぜざることを明かにした語法である。斯の如きは印歐語が諸國語に分裂した後に至つて、各國語別々に發達した用法であると認められて居るが、然も、諸國語に於ける用法は互に相似の間に在り、<sup>(1)</sup> 何れもその傳承事項が、傳承によつて傳達者の腦裡に植付けられた一箇の想に過ぎないことを示すものである。これ等を比較して見ても、『傳承回想』なるものは極めて叙想法と近接した關係にあるものであることが肯かれ、従つて英語の“Past Tense”の用法中には著しく叙想的なもの、含まれて居ることが頗る明瞭に觀取出來ると言はなければならない。

(1) The use of the optative and the subjunctive in expressions of 'oblique speech' (*Oratio Obliqua*) is one of the developments which took place later than the period of the parent language: it grew up independently but on parallel lines in Greek, in Latin, and in the Germanic languages. Here the Greek optative and the subjunctive of the other languages indicate that the speaker or writer is merely reporting a statement or opinion of another person or of himself on another occasion.—Sonnenschein, *The Soul of Grammar*, p. 105.

15. “Past Tense” = “Present Tense” と見らるゝ場合。  
次に、私が昨年の小著に於いて、“Past Tense”の本  
來の意義は「過去の時」を表はすものにあらざるこ  
を示す一つの場合として指摘した<sup>(1)</sup>

Faint heart never *won* fair lady.—*Proverb*.

(懦夫にして美姫を得るものはあらず)

Men *were* deceivers ever.

—Shakespeare, *Much Ado about Nothing*, II. iii. 65.

(男は常にくはせもの)

When wanton Wealth her mightiest deeds hath  
done,

Meek Peace voluptuous lures *was* ever wont to shun.

—Byron, *Childe Harold's Pilgrimage*, I. xxii.

(放恣なる富その贅を盡せば、温和なる平和その豪  
奢を避くるが習ひ)

の如き、言者の思想の低回によつて情緒の纏綿を見  
る場合は、これを一面より觀察すれば一種の傳承事  
項であつて『なるほご何々であるわい』・『やつぱりさ  
うだなあ』といった様な意味をなす用法であり、それ  
が自己特發の所感に關して現はれると、これも昨年  
の小著に指摘した<sup>(2)</sup>

(1) 拙著『動詞時制の研究』pp. 21-2 参照。その説明に就いては同書  
p. 87 以下参照。尙、此處に擧げた第一例は Dryden の None but the  
brave *deserves* the fair と事件的結果に於いては、さして相異點の無い様  
に見え、又 Faint hart neither *winneth* Castell nor Lady (Lyly, *Euphues*  
and his England, Arber's Reprint, p. 364) の如きもある。

(2) 同書 pp. 21, 87, 89 参照。



Tot *was* mother's darling!

(おゝ可愛いものを)

I *thought* as much.

(その位のことだと思つた)

の様な日常所用の語となるのである。これ等を、昨年も指摘した<sup>(1)</sup> 北歐諸國語に於いて規則的に用ひらるゝ

Det *var* roligt, att du gick igenom i examen. (Swedish)=It *was* pleasant=I *am* glad that you passed the examination.

Det *var* kedeligt! (Danish)=It *was* annoying!=I *am* sorry.

の如きや、さては我が國語に於ける

父上よ今朝は如何にこ手をつきて問ふ子を見れば死なれざりけり (故落合直文先生)

等に於ける「けり」の用法や、日常語に於ける『難有う御座いました』・『困つたなあ』・『こりや驚いた』・『今度の上りは何時でした』・『さあ、何時だつたつけ』等に引き比べて考へて見たならば、こゝに初めて "Past Tense" なるものが、通常これ迄の學者の考へて居た様に「叙實」の力を有するばかりでなく、その半面に於いては實に強烈なる「叙想」の力を有するもので

(1) 拙著『動詞時制の研究』pp. 23, 88 参照。

あるこそが了解出来るであらう。一度、その本質を把握し、その「叙想」の力を確實に認識し得たならば、近世の英語に於いて所謂 Subjunctive Past なるものが衰へ、叙實法の “Past Tense” がこれに代る傾向が著しくなつた有力なる一原因が會得せらるゝであらう。それは決して従來說かれた様に音韻の變遷と接續詞への責任轉嫁<sup>(1)</sup>に依つてのみ説明せらるべき性質のものではない。又、Jespersen の如く If he had money enough も、At that time he had money enough も、又、I wish he had money enough も皆 He has money enough の反對であるといふ、巧妙ではあるがあまりに理窟詰めの、氏の所謂論理を以て此事實の全部を説明し得るものと考へ (*The Philosophy of Grammar*, p. 265; *A Modern English Grammar*, Pt. IV, p. 114) たり、卒然として “Imaginative Use of Tenses” を説く (*A Modern English Grammar*, Pt. IV, p. 112, ff.) が如きは未だ以て充分なりとは認め難い。Jespersen は只、本來過去の時を示す爲の動詞語形は屢時間的意義無しに非現實、不可能、非蓋然等を表はすに用ひられると言ひ、これを “imaginative tenses” 又は “tenses of imagination” といふと言つて居るのであるが、それだけの事ならば、

(1) §11 に引いた Bain の説、及びそれに對する Mason の駁論参照

それは只、時計を動かす發條(ばね)を蓄音機に利用した  
さいふ位の陳述に過ぎず、毫も發條そのもの、本質  
乃至原理には觸れて居ないのである。

16. "Future Tense." 次に、"Future Tense"に就い  
て見ればそれは絶対に非現實である。I shall be twenty  
next month の如き數理上確實と認め得べき場合です  
ら、それが未來界に關する陳述である限りは、I am  
not yet twenty と同一程度に於いて確實とは言ひ難  
い。故に、"Future Tense"を『叙實法』の中に入れて  
も、それは "Present Tense" や "Present Perfect"  
の場合に於けるとは全然その意義と價值とを異にし、  
"Past Tense" の場合と比べてさへ大にその趣きを異  
にするものであることが分る。今日の英語に於いて  
未來を表はす助動詞と稱せらるゝ shall 及び will は、  
元來夫々 "owe" 及び "intend" を意味する動詞であ  
つたので、尙一層その根源に溯れば前者は "ought"  
を意味する "Past Tense" から轉向して來たもので  
あり、後者はその成立に於いて叙想法のものであつ  
たのである<sup>(1)</sup>が、夫々の原義が弱められて "Future

(1) The present tense of this verb (*i. e.* 'willan') was originally an optative (subjunctive) form of a verb in -mi, which already in prim. Germanic came to be used indicatively.—Wright, *Old English Grammar*, p. 288. 尙、shall の歴史に就いては拙著『動詞時制の研究』p. 32 脚註參照。

Tense”の助動詞となつたのは shall の方が will よりも古い歴史を有するので、その結果は shall の方が will よりも原義消磨の程度が進んで居ることになる。これ shall, should の方が多く屢叙想法に代る助動詞として用ひらるゝ所以である。印歐古語に於いて叙想法が元來「未來時」を表はすものだと考へられる<sup>(1)</sup>のも、實は此間の消息を逆に見ただけのことで、叙想の力あるが故に未來にもなるのであつて、未來を表はすが故に叙想の力が生じたのではない。私が昨年の小著に於いて、英語の He will already be asleep や、獨逸語の Er wird schon schlafen や、佛蘭西語の Il dormira déjà 等に就いて多くの學者の説を排し、Jespersen の逆倒效果説(それは前節に引いた氏の Imaginative Use of Tenses と軌を一にするものであるが)を本末顛倒の論であると言つた<sup>(2)</sup>のもこのわけである。我が國語に於いても、所謂『未然段』の語形に「む」を添加した語、即ち例へば

居り明かし今宵は飲まむ<sup>(1)</sup> 霍公鳥明けむ<sup>(2)</sup>

朝は鳴き渡らむ<sup>(1)</sup>ぞ (萬葉集、卷十八)

の(ロ)、(ハ)を(イ)と比較して見れば、そこに古今の歐

(1) 本書 28 に引いた Goodwin 及び Monro の説 (夫々 pp. 17, 19 脚註) 参照。

(2) 拙著『動詞時制の研究』pp. 147-8 参照。

洲語に於けるゝ頗る相似たる關係の存在するこゝが認められる。即ち、我が國語に於いて、若し動詞活用此階段を『未然段』と名附くるこゝが妥當なりとするならば、又同時に、これを『叙想段』と稱しても良い様に思はれる。否、若し、私が去年の小著に披瀝した考が是認せらるゝ時が來たならば「叙想」の名の方が「未然」の名よりも一層適切なりとせられなければならない筈である。<sup>(1)</sup>尙、我が國語に於いては否定の陳述が此段の語形を基礎として造られるのであるが、これ亦その本質が叙想的のものであることを示すものと言はなければならない。それから又、

萬代に年は來經とも梅の花たゆることなく咲き渡  
るべし (萬葉集、卷五)

等も未來の部類に入れられるが、此「べし」は昨年も言つた様に「筈」といふ語から分化したもの<sup>(1)</sup>で、これを

夜ふけ侍りぬべし (源氏物語、桐壺)

吾がせこが來べき宵なりさゝ蟹の蜘蛛のおこなひ  
今宵しるしも (日本書紀、卷十三)

等と比較するこゝ、それが如何に shall, should と近似的關係にあるかゞ分るであらう。されば、今若し此

(1) 拙著『動詞時制の研究』p. 152 参照。尙、「む」の語源に関する私見に就いては同書 p. 151 参照。

「む」、「べし」を通覧するに明徹なる洞察眼を以てした  
ならば、私が年來言ふところの『叙想法』及び『叙想法  
相當句』、乃至『假裝叙想法』なるものゝ、決して空論  
でないことが、我が國語の投する側光に依つて一層  
明瞭にせられると言つて差支へが無いであらう。